

17世紀末イギリスを旅した女性

—Celia Fiennesの*The Journeys of Celia Fiennes* (c.1685-1703) に描かれたイギリス

小柳 康子

はじめに

Celia Fiennesは、ピューリタンによる共和政が終焉して王政が回復した2年後の1662年、Salisburyからほど近いWiltshireの小さな村Newton Toneyで誕生した。彼女は女性が家を離れて旅をすることが困難な時代に、国内のほとんどすべてを馬で踏破し、その詳細な記録を残した女性である。この時代の女性としては珍しく未婚のまま過ごしたシーリアは、1741年にLondonでその生涯を終えている。8th Baronであり1st Viscount Say and Seleでもあった祖父William Fiennesも、その二男である父Nathaniel Fiennesも、17世紀の内乱を導いた国教会とピューリタンとの対立において、反国王の旗幟を鮮明にして生きた人間であった。また母Francesの父Richard Whiteheadも同様にピューリタンであった。このような環境に生まれ育ったシーリアも「非国教徒」(“dissenter”)であったと思われるが、それがどのような教派であったのかは不明である。

シーリアの旅の記録には、訪れた町や村のたたずまい、マーケットで売られている数々の物品、宿泊した宿屋の様子や食事のメニューなどの事柄から、移り変わる自然の姿、保養地での体験、自ら足を踏み入れて観察した炭坑を始めとする鉱山の状況や見学した工場の姿、有名なカントリーハウスとそれに付随した庭園を見学した時の印象までの多岐に渡る事柄が記されている。追剥に遭い、馬から投げ出され、険しい道を難渋して進む様子も至るところに書かれている。そのためこのテキストは、17世紀末から18世紀初頭にかけてのイギリス近代初期の社会のありようを示す第一級の資料とされているのである。

長い間手稿のまま残されていたシーリアの記録は19世紀に不完全な形で2度出版されたが、決定版とされているのは、1947年に出されたChristopher Morris編のテキストである。これは、句読点もほとんどなく、スペルや文法

的誤りも多い手書き文字を20世紀の読者に理解できるように修正を施しただけでなく、数度に及んだ旅の記録を4部に分けて整理し、「序文」、「注」、「付録」（遺言の解説）、さらには父方、母方の「家系図」を付した文字通りの労作であった。⁽¹⁾ G. M. Trevelyanが「はしがき」において“We have here got a correct text, an explanation of many obscurities both as to place names and other matter, and excellent explanatory notes — in short a definitive edition” (xi) と述べている通り、モリスのテキストによって、シーリア・ファインズが近代初期のイギリス女性のライティングの歴史の中で忘れてはならない女性の1人となったということもできるだろう。本稿では、『シーリア・ファインズの国内旅行』（以下『旅行』）の中で、新しい世紀に向かうイギリスがどのように描かれているのかを紹介しながら、イギリスの「旅する女性」のパイオニアといえる稀有な女性の姿を浮かびあがらせてみたい。

1. 旅と旅行記

現代に生きる私たちのうち、「旅」を経験したことのない者は皆無だといってもいいだろう。心身の障害や特殊な事情で生まれた場所からの移動を阻害されている場合を除けば、私たちは様々な土地へ旅をする。そして旅人のうちある者は「旅行記」と呼ばれる記録を残し、それを読む者は、自分の家を離れることなく未知の風物に出会うことが可能になるのである。旅行記は古代エジプト墳墓の書きつけにも見出すことができるほど古くから存在していたという。またギリシア・ローマ時代に書かれたPausanias、Herodotus、Plinyなどの旅行記には、異国の地理、文化的モニュメント、神話などの多様なトピックが盛り込まれており、『聖書』にも旅の記述は多い。⁽²⁾

古い時代に旅をした人間は、商人、船乗り、聖職者、探検家、植物学者、地理学者、大使などの特別な職業や階級の人間に限られていたが、時代が進むにつれて、旅は必要に迫られた少数の人間だけのものから、より多くの人々に開かれたものとなっていった。日常生活から脱出して未知の世界を知りたいという人間に共通の欲望が、旅という行動に直結するようになったのである。こうして、経済の発達や交通手段や宿泊施設の改善とも相俟って、17世紀から18世紀にかけては、上流階級の子弟の教育を仕上げする大陸への「グランド・ツアー」(“Grand Tour”) が隆盛をきわめ、18世紀末には、現代の私たちが思い浮かべる旅—保養地へ出かけたり歴史的史跡を巡るなどの観光旅

行一が誕生した。さらに19世紀半ばに鉄道網の発達と共に博覧会へのパック旅行なども始まり、旅は一般大衆が気軽に出かけることのできるレジャーとなったのである。⁽³⁾

旅に従事した人間による記録である旅行記は、旅の目的が千差万別であるように内容も多彩であるが、これらのテキストにはみな共通に、見慣れぬ「他者」が描かれている。生まれ育った場所とは離れた場所へ行き、再び元の場所へと戻る行為が旅である限り、これは当然のことと言えるだろう。旅人が偏見を交えず自らの体験を客観的に語ることを心がけても、なじみ深い場所から移動し、その体験を記録する旅行記には、自分とは異質な「他者」が常に表象されることになるからである。ポストコロニアル思想が文学・文化研究のジャンルとして確立されるようになった1970年代以降、西欧人がアジア、アフリカなどの地域を旅した旅行記とそれに関する批評が数多く出版されるようになった理由の一端はここにあると思われる。

しかし旅には外国への旅だけではなく国内旅行もある。イギリスにおける国内旅行は18世紀後半の「ピクチャレスク」(“picturesque”) 思想の流行以降に盛んになったとされている⁽⁴⁾が、17世紀後半から18世紀半ばに至る時代にも、国内を旅行して旅行記を残した者は少なくなかった。その中でもシーリア・ファインズの『旅行』は、この時期に女性によって語られた唯一の旅の記録という意味において、注目すべきテキストであるといえる。

2. 巡った土地と母フランス

『旅行』には日付がほとんど記されていないため、決定版テキストの編者クリストファー・モリスは、言及されている歴史的事実と個人の伝記的事実を丹念につきあわせ、彼女の旅は1685年頃から1703年までの10数回におよび、手稿の大部分はこの間に書き溜めた日記を基にして1702年に書かれたと推測している(xxii-xxiii)。これらの旅は、日帰りやほんの数日の短いものから、2ヶ月近くに及ぶ長いものまで様々であった。⁽⁵⁾

すでに述べた通り、モリスはこの『旅行』をそれらが行われた年代に従い4部に分けている。第1部は“The Early Journeys in the South” (c. 1685-96) とタイトルを付けられており、ニュートントニーとロンドンとを基点とした比較的近隣地域である、ウィルトシャー、Somerset、Berkshire、Oxfordshire、Hampshire、Sussexへの5回に及ぶ短い旅について述べられて

いる。“The Northern Journey and the Tour of Kent” (1697) というタイトルが付けられた第2部の大部分は、ロンドンを出発してCambridge、Huntingdon、Peterborough、Lincoln、Nottingham、York、Scarboroughへと北上し、そこからHarrogate、Pontefract、Wolseley、Coventry、Warwickを経てロンドンに戻る1697年の旅の記録である。さらにこの第2部には、Canterbury、Doverへの短い旅と、Tunbridge Wellsで保養した2つの旅の記録も付け加えられている。第3部はシーリアの最も長い旅の記録で、“My Great Journey to Newcastle and to Cornwall” (1698) と題されている。ロンドンを出発したシーリアは、Colchester、Norwich、Ely、Bury St. Edmunds、Peterborough、Leicester、Liverpool、Lancaster、Kendal、Penrith、Carlisle、Newcastleへと足を伸ばした。彼女はScotland全域を巡るつもりでいたようだが、奥地まで行くのは危険と考えて、辺境地域から南下してCornwallまで旅を続けた。ルートはDurham、Richmond、Leeds、Manchester、Shrewsbury、Worcester、Stoke Edith、Gloucester、Bristol、Exeter、Plymouth、Penzanceとなる。その後シーリアは、Dorchester、ニュートントニーを経てロンドンに帰りついた。第4部は3部までとは異なり、記録の中心をなすのはロンドンのLord Mayor’s Show、James II、William IIIとMary II、Anneと続く王の戴冠式の詳細な描写である。この後、Hampton Court、Windsor、Epsomなど、世紀が変わってからの旅の記録によりこのテキストは終わっている。

ここにあげた地名はほんの一部にすぎず、テキストには通過し滞在した場所はすべて、街路の状況、教会や大きな建物の外観と内部の様子、マーケットなどの描写と共に記録されている。これらが実際にどのようなスタイルで書かれているのかを理解するため、第1部のニュートントニーからソールズベリー、ウィルトンを経てIsle of Purbeckへと向かった旅の冒頭の部分を引用してみよう。なおSarumとあるのはソールズベリーの古名である。

The account of several journeys into several parts of England with many remarks; some with my mother from Newton Toney, Wiltshire which is all on the downs which is open country that is pleasant for all sports...From Newton Toney I went to Sarum 8 miles which is a city of a bishop’s seat. It is a pretty large town and streets are broad but through the midst of them runs a little rivulet of water which makes the streets not so clean or so easy to pass in. They have steps

to cross it and many open places for horses and carriages to cross it....The houses are old mostly timber buildings and there is a large market house with the town hall over it and a prison just by. There is also a large cross in another place and house over it for a constant market for fruit, fowl, butter and cheese and a fish market. The town is well served with all provisions and there are good buildings in that part they call the Close. Both new built and the old good houses belong to the doctors of the church. (5-6)

ソールズベリー大聖堂内部の克明な描写の前に置かれたこの引用からだけでも、自分の見たことを事実在即して書きとめようとする彼女の姿勢が理解されるであろう。感情を排して対象を描くこのスタイルは『旅行』全体を貫いている。しかしこれは、テキストには個人的な心情が欠落しているということの意味するのではない。むしろ淡々と事実を描写する素っ気ないともいえる言葉の中に、私たち読者は、シリアの家族に対する思いや彼女自身の感情の襲撃を聞き取ることができるのである。このソールズベリーの記述に使われている「母と共に」という言葉もその例ということができる。

「母と共に」という言葉はこの後2回使われている。シリアは母フランスが1691年に亡くなる前、連れ立ってソールズベリー、Broughton、Readingへ旅をしたのである。プロートンには祖父ウィリアム子爵のあとを継いだ兄の館があり、レディングは天然痘で亡くなった姉が埋葬されている教会のある土地であった。ここでもシリアの言葉は、“Reading is...a pretty large place; there are several churches and in one lies buried one of my sisters that died at my grandmother’s house there of the small pox” (28) と相変わらず簡潔であり、母と何を話したのかはおろか、自分自身の思いも全く語られていない。しかし奇妙にも、このような事実の羅列によって、肉親を亡くした母と娘の悲しみが雄弁に伝わってくるということもまた確かなのである。『旅行』を読む楽しみは、このように女性が書いた記録でしか味わえない行間を読む作業にもあるといえるのだ。

3. 自国への誇り

『旅行』には“To the Reader”と題された序文が付けられており、その中でシー

リアは、型通りに自分の手稿に対する謙りの言葉を述べた後、次のように書いている。

...if all persons, both ladies, much more gentlemen, would spend some of their time in journeys to visit their native land, and be curious to inform themselves and make observations of the pleasant prospects, good buildings, different produces and manufactures of each place, with the variety of sports and recreations they are adapt to, would be a sovereign remedy to cure or preserve from these epidemic diseases of vapours, should I add laziness? It would also form such an idea of England, add much to its glory and esteem in our minds and cure the evil itch of overvaluing foreign parts; at least furnish them with an equivalent to entertain strangers when amongst us, or inform them when abroad of their native country, which has been often a reproach to the English, ignorance and being strangers to themselves. (1-2)

ここで彼女が、「母国」を旅し、土地に固有の「素晴らしい景色、建物、様々な生産物、産業、スポーツ、娯楽」を知ることを男女共に勧め、それが「流行性の病に対する最も重要な治療薬」だと述べていることは注目に値する。外国旅行を流行性の病とし、国内の旅がそれに対する治療薬だとシーリアが書いた時、彼女の意識にはグランド・ツアーに代表される外国旅行があったに違いない。グランド・ツアーにより、立派な洗練された紳士となって戻って来た若者がいた半面、軽薄で墮落した人間となってしまった者も少なくなかったからである。⁽⁶⁾ 金と時間をかけて無益な外国旅行に出かけるよりは、自分の国を旅してその現状をつぶさに見、愛国心を高めることこそがイギリス人にとって重要だということである。これはとりもなおさず、激しい宗教対立を乗り越えて新しい時代へと向かう17世紀末イギリスに生きるシーリアの、自国の歴史、文化、自然などのあらゆるものに対する誇りや自信を示す言葉ともいえるだろう。⁽⁷⁾ シーリアはイギリスを豊かな可能性を孕む国家として対象化しているのである。

教会やカントリー・ハウスや庭園は言うに及ばず、新しく興りつつある産業を含めたイギリス人の生活全般に関わる事物を記録しようとする態度こそが、この誇りと自信に由来するものだといえよう。これはDerbyshire

のBakewell近くの鉱山で採れる大理石について“I took some of it and showed it to several and they think it comparable to any beyond sea” (101) と述べる言葉に確かに響いている。バーバラ・コルテは『旅行』におけるイギリスを“the travelled country is observed in great detail and recounted in an encyclopedic manner”⁽⁸⁾ と言い表わしているが、これはシリアの自国への誇りを巧みに言い当てた言葉に他ならない。

4. 『旅行』に描かれた「スパ」— BathとBuxton

シリアの『旅行』には非常に多くの事象が記述されているが、彼女がとりわけ熱を込めて描写しているのは「スパ」(“spa”) 体験である。17世紀末にはまだ“spaw”と綴られていた「スパ」には、現代の私たちが思い浮かべる「スパ」とは異なり、1) 様々なミネラル成分を含んだ温水に実際に入浴する「温泉」(“hot spring”)、2) 自然の中に「鉱泉水」(“mineral water”) が湧き出る場所という2つの意味がある。シリアが『旅行』の中で書く「スパ」にもこれら両方の意味が含まれている。⁽⁹⁾

イギリスにおけるスパの歴史は1世紀半ばに始まったローマ支配時代に遡る。ローマン・ブリテン時代にはすでにバースとバクストンが知られていたように、イギリス人は古くから温泉に馴染んでいた。しかし5世紀初頭のローマ撤退と共に温泉に入る風習は廃れ、バースの石造りの建物は荒れるがまま放置され、バクストンは流れ出る鉱泉を飲み、鹿がやって来るだけの場所となっていた。ヨーロッパ各地では9世紀頃から再び温泉の効用が見直されるようになったが、地元の人々だけに知られていた温水浴がイギリスで本格的に復活したのは16世紀に入ってからである。Elizabeth Iの時代になって、温泉に入りそれを飲用することが身体の疾患に効果があると理解されはじめ、古くからのスパが有力貴族の経済的援助を受けて新たな施設を整えて復活したのである。さらに16世紀後半には、ハロゲートやKing's Newnhamなどの新しいスパの開発も進められていった。⁽¹⁰⁾

Stuart朝になるとJames I世の後Anne of Denmarkが痛風治療のためにバースに3度出かけたのを嚆矢として、ロイヤル・ファミリーのスパ滞在は顕著になっていく。Charles I世の後Henrietta Mariaも17世紀初めに人気の高まったタンブリッジ・ウエルズに何度か出かけている。内乱が終わり共和政の時代になってもスパは閉鎖されることなく利用され続け、1660年の王政復古後は、

スパに滞在して温泉に入り、飲泉することはそれまでの王族や貴族階級だけに留まらず一般大衆にまでも広まっていった。1603年にはほんの少数だったスパの数は、1640年までに13、1660年に16に増え、それから半世紀後には Astrop、Horwood、Barnetなどのロンドン近郊にもスパが発見され、首都から近くて便利なこれらの場所は新しいスポットとして人気を集めるようになったのである。⁽¹¹⁾

シーリアが訪れたスパは、バース、バスクトン、タンブリッジ・ウエルズ、ハロゲート、カンタベリー、バーネット、エブソム、アストロップ、ホルウッド、スカーバラ、ダラムなど10以上に及ぶ。これらの場所で実際に入浴し温泉水や鉱泉水を試飲したシーリアの記録は、彼女が当時としては稀有な好奇心とエネルギーを持ち合わせた女性であることを示していると同時に、18世紀に治療と保養と社交を兼ねたイベントとなっていくスパ滞在の萌芽がすでに17世紀末にもみられることを示す貴重な証言でもあると言えるだろう。

『旅行』において最初に出てくるスパはバースである。次の引用からも分かる通り、シーリアが訪れた1687年頃のバースは、家具付の新しい部屋を持つ宿屋も増えて滞在客の需要を満たしていたが、町全体は温泉の蒸気で空気が暑苦しく澁み不快なところという印象を与えた。

...; there are several good houses built for lodgings that are new and adorned and good furniture, the baths in my opinion makes the town unpleasant, the air thick and hot by their steam, and by its own situation so low, encompassed with high hills and woods. (17)

しかし長期間の停滞から復興途上にあったバースが依然としてイギリス随一のスパであったことは、シーリアがここでの入浴体験を異例の長さで描写しているところに明らかである。また、Hot bath、Cross bathなど5つの湯の大きさや湯温の説明から、入浴者に付き添うガイドや「見張り人」(“sergeant”)と呼ばれる監視者の存在、湯の中での歩き方、不自由な身体の一部に「湯の圧力をかけるポンプ治療」(“persons are pumped in the bath”)(19)を施されている病人の様子、上がった後に休む部屋、毎日湯を取り替えてきれいにする規則、試飲した温泉水の味までのバースの描写の大部分は「クロス・バス」に費やされていることから、シーリアにとって「クロス・バス」が特に強調したい湯であったと思われる。

...the third bath is called the Cross bath which is something bigger than the former and not so hot; the cross in the middle has seats round it for the gentlemen to sit and round the walls are arches with seats for the ladies —...the ladies go into the bath with garments made of a fine yellow canvas, which is stiff and made large with great sleeves like a parson's gown, the water fills it up so that its borne off that your shape is not seen;...The gentlemen have drawers and waistcoats of the same sort of canvas which is the best lining, for the bath water will change any other yellow. (19)

ここでは、男性は中央にある「クロス」周りのイスに、女性は湯船を取り巻く壁に穿たれた「アーチ」の前にあるイスに座ること、湯の中では男女共にキャンバス地の着衣を使用するなどの入浴の際の心得が述べられている。また、女性の着衣は袖が広くたっぷりとしており、湯に入ると体の線が見えないように工夫されているという、実際に入った者だけが分かりえる描写から、シーリアは男湯のKing's bathや女湯のQueen's bathではなく、あえて混浴の「クロス・バス」に入浴したと思われる。⁽¹²⁾ カントリー・ハウスに飾られている絵画の中の人物が衣装をつけていないことにも欠点を見出す女性であったシーリア⁽¹³⁾ が、下着を着けていたとはいえ男女混浴の「クロス・バス」に入浴したのである。ここに、自分の生きる社会の現状をまるごと伝えたいという、『旅行』に一貫して流れるシーリアの好奇心と気概を見て取ることは可能であろう。

バースと並ぶ古い伝統を持つバクストン滞在は2部に記録されている。シーリアは1697年にバクストンを訪れた時、宿と食事に強い不満を持ち、『旅行』にはめずらしく激しい口調でこの場所を非難している。それによると、「定食付宿」(“an ordinary”) の値段は高く、エールやワインは代金に入っていないこと、ビールはあまりに不味く飲むにたえない代物であること、また相部屋に押し込められたり、1台のベッドに3人寝させられることもあり、2、3日以上泊まる客はいなかったという。ここで2泊したシーリアは、泊り客が宿の中にある湯船に出たり入ったりするため騒がしかったとも述べている。

...all your ale and wine is to be paid besides, the beer they allow at the meals is so bad that very little can be drunk....the lodgings are so bad;

2 beds in a room and some 3 beds and some 4 beds in one room; so that if you have not company enough of your own to fill a room, they will be ready to put others into the same chamber, and sometimes they are so crowded that three must lie in a bed; few people stay above two or three nights as it is inconvenient;...there is no peace nor quiet with one company and another going into the bath or coming out; (103)

ここには、前世紀にMary, Queen of ScotsやSir Robert Cecilも訪れて高級スパの地位を不動のものとしていたバクストンが、この当時には宿と食事という保養地の必須条件を満たすことができなくなっている現実が示されている。これは同時に、スパ滞在の目的が心身の疾患を治療することから休養や社交を中心とするものへと変化してゆく趨勢の中で、バクストンが昔のままの古い施設を改善する努力をしていないというシーリアの鋭い指摘に他ならない。⁽¹⁴⁾

しかし宿や食事に不満はあっても、バクストンの温泉に入浴することはシーリアにとってバースと比較しながら湯に入る絶好の機会であったと思われる。彼女はバクストンの湯について「サマセットシャー州の温泉では」(“in the Somersetshire baths”)と、バースを念頭に置いた言葉を3度使用しているからである。それによれば、「バクストンの湯温はバースよりずっと低く、体が震えた」(“I was in it and it made me shake because it was far from the heat that is in the Somersetshire baths;”) (103) ほどで、「入浴にはここでもガイドの付き添いが必要で、湯は首あたりまであり立つ時鎖につかまるが、深い場所では転倒することもあった」(“you must have a guide that swims with you, and you may stand in some place and hold by a chain; the water is not above your neck, but in other parts very deep and strong, it will turn you down;”) (104) という。バクストンの湯温がバースと比べて低いことは、16世紀に書かれたWilliam Harrisonのイギリス国内の鳥瞰図ともいえるテキスト*The Description of England* (1587)にも述べられている⁽¹⁵⁾が、ここでのバクストンの説明もバースの場合と同じく、シーリアが実際に湯船に入った体験からくる具体性を持っている。

シーリアはバースとバクストンで入浴しただけではなく、当然その温泉水を飲んでもいる。バースのものは「熱く、ゆで卵を茹でる湯のような味がした」(“it is very hot and tastes like the water that boils eggs”) (20) と、またバクストンのものは、「味は不味いというほどではないが…腹をゆるくすると言わ

れている」(“the taste is not unpleasant”...they say it is diarrheic”)(104) ため少し残したと書かれているところから、これらの温泉水の味は嫌悪を感じさせるものではなかったようだ。濁っていたり、落ち葉に覆われている飲泉場のエプソムやバーネットではさすがのシーリアも飲むことをためらったが、タンブリッジ・ウエルズやハロゲートでは積極的に試飲してその体験を語っているところから、身体にいいとされるものは何でも試そうとする彼女の前向きな姿勢がここにも表れているといえるだろう。⁽¹⁶⁾

おわりに

17世紀末のイギリス社会に関する事柄が網羅的に記録されているシーリア・ファインズの『旅行』は、どこを読んでもこの時代についての新しい情報を与えてくれるテキストである。本稿では今までほとんど研究されることのなかった近代初期のスパを、ローマン・ブリテン時代に遡るバースとバクストンに焦点を当てて紹介したが、これら2つを含むシーリアの訪れたスパは、18世紀、19世紀と時代が進むにつれて浮沈を繰り返し、その様相を変えていった。18世紀半ばまで生きたシーリアは、この変化を確かに体験したと思われるが、彼女がそれをどのように感じとったのかは想像する他ないのが残念である。

馬の鞍に乗って17世紀末のイギリスを縦横無尽に旅し、その社会の実情を書き残したシーリア・ファインズは、私たちが近代初期の女性について持つ先入観を打ち壊してくれる。300年以上前のイギリスにこのような型破りともいえる女性がいたことを知ることができるのは、女性のテキストを通史的に読み続ける作業により与えられる僥倖と言えるだろう。

注

- (1) シーリア・ファインズとその家族の伝記的事実、テキスト出版の経緯については、モリスの序を参考にした。長らく手稿として残されたままであったシーリアの記録が最初に印刷・出版されたのは、1812年に詩人Robert Southeyが『雑録』(“miscellany”)の中に短い抜粋を載せたのが最初である。その後1885年になって、Emily W. Griffithsが*Through England on a Side Saddle, in the Time of William and Mary. Being the Diary of Celia Fiennes* というタイトルの下に不完全ながらもシーリアの旅行記をまとめたかたちで出版した。モリスは1947年の決定版テ

キストを一部割愛して63枚のイラストを新たに載せたハードカバーを1982年に出版し、17世紀末の庭園の主風潮に関する彼の知見を新たに序に付け加えている。本稿の引用はすべて1947年版によるが、文章にはコンマやピリオドを適宜補い、スペルは現代英語に直し、分かりにくい表現には語順を変えたり単語を補うなどの修正を施した。なおテキストからの引用のみページ数を本文中に記した。Celia Fiennes, *The Journeys of Celia Fiennes*, Christopher Morris ed. (London: The Cresset Press, 1947); Celia Fiennes, *The Illustrated Journeys of Celia Fiennes: 1685c.-1712*, Christopher Morris ed. (Exeter: Webb & Bower, 1982).

- (2) 「旅」に内在する「移動」には空間的移動だけではなく時間的移動もあるため、「旅」を「過去への旅」、「心の旅」、「人生という旅」と比喩的に使用することも可能であるが、もちろんここでは「旅」を、実際に場所を移動するものとして考えている。ここでの旅行記の起源に関しては以下を参考にした。Barbara Korte, *English Travel Writing: From Pilgrimages to Postcolonial Explorations*, Trans. By Catherine Mttias (London: Macmillan Press, 2000), 21-22; Elizabeth A. Bohls and Ian Duncan eds., *Travel Writings 1700-1830: An Anthology* (Oxford: Oxford U. P., 2005), xiii-xxxvii; Peter Hulme and Tim Youngs eds., *The Cambridge Companion to Travel Writing* (Cambridge: Cambridge U. P., 2008), 1-8.
- (3) グランド・ツアーやツーリズムに関しては非常に多くの研究書が出されているが、ここでは主に次のものを参考にした。James Buzard, “The Grand Tour and after (1660-1840)”, in *The Cambridge Companion*, 37-52; Korte, 40-61; 本城靖久『グランド・ツアー：良き時代の良き旅』(東京：中央公論社、1983)。
- (4) Esther Moir, *The Discovery of Britain: The English Tourists 1540-1840* (London: Routledge & Kegan Paul, 1964), 123-38; Korte, 77-81.
- (5) 『旅行』にはひとつの場所から次の場所までのマイル数と全行程の距離が必ず書かれているのとは対照的に日付や期間はほとんど記されていない。従ってひとつひとつの旅の期間を特定するのは難しいが、ここでは数少ない次の記述を基にした。“Blessed be God, very well without any disaster or trouble in 7 weeks time” (121); “Thence I went to Wolseley 7 miles farther to Sir Charles Wolseley where I stayed 6 weeks” (165).
- (6) グランド・ツアーが若者を立派な大人にするのではなくその反対もあったことは、17世紀のJohn Lockを初めとして18世紀に至るまで多くの批判者が述べているという。本城、219-23。
- (7) シーリアの『旅行』には新しい時代のイギリスという国に対する“a sense of patriotic pride”があり、“an imagined state of nationhood and community”に寄与したという議論に関しては次を参照。Zoë Kinsley, *Women Writing the Home Tour, 1682-1812* (Aldershot: Ashgate Publishing Company, 2008), 1-9.
- (8) Korte, 68.
- (9) スパの語源は、ベルギー南東部に住むWalloon人の使用したワロン語で泉を意

味する“espa”であるという説、「散水する」、「湿らす」という意味を有するラテン語の“spargere”に由来する説、“sanitas per aquas”（「水により健康を」）というラテン語のフレーズの頭字語に基づく説など諸説があり一定していないが、ベルギーのアルデンス地方にある保養地に“Spa”という固有名詞が付けられたのは1326年であるというのは確かなようである。これに関しては以下を参照。Alev Lytly Croutier, *Taking the Waters: Spirit • Art • Sensuality* (New York: Abbeville Press, 1992), 170; 阿岸祐幸・飯島祐一『ヨーロッパの温泉保養地を歩く』（東京: 岩波書店、2006）、6。

- (10) Phyllis Hembry, *The English Spa: 1560-1815, A Social History* (London: The Athlone Press, 1990), 1-20; The Council of the Borough of Buxton, *Historic Buxton and Its Spa Era* (Buxton: Buxton Corporation, 1971), 1-3. ヘンプリは、イギリスの16世紀から19世紀初頭にかけての温泉浴と温泉水および鉱泉水飲用の歴史を、社会的、地誌学的、医学的方面にも目配りをしつつ叙述した該博な研究書である。1815年から現代までのスパの歴史も出版する予定でいたヘンプリはこれを果たす前に亡くなったため、彼女の生前集めていた資料を基に1997年に第2部が出版されている。Phyllis Hembry, *British Spas: From 1815 to the Present, A Social History*, eds. and completed by Leonard W. Cowie and Evelyn E. Cowie (Madison and Teaneck: Fairleigh Dickinson U. P., 1997).
- (11) Hembry, 39-65; 302. ヘンプリはこの変化を「著しいスパの増殖」(“a marked proliferation of English spas”) (66) という言葉で言い表している。
- (12) 「キングズ・バス」と「クイーンズ・バス」はすでに16世紀半ばには男女別湯となっていたが、「クロス・バス」はまだ17世紀末には混浴であった。しかし離れた場所に男女別のベンチがあるなどの描写から、「クロス・バス」が男女別湯の形に移行しつつあったことが理解される。16世紀のバースの浴場形態に関しては次を参照。Hembry, 25-38.
- (13) シーリアは1697年の旅でStamfordを通過した際、Lord ExeterのBurghley Houseを見学し、エクセター卿が旅行で集めた琥珀や珊瑚を始めとする国内外の「珍しい収集品」(“curiosities”) や、ブルーの絹地に金糸で刺繍された豪華なベッドカバーなどに驚嘆した。その時彼女は部屋ごとに掛けられている絵画の人物が裸体かほとんどそれに近いのは不謹慎だという印象をもらしている。“... (there were) very fine pictures, but they were all without garments or very little, that was the only fault, the immodesty of the pictures...;” (69).
- (14) スコットランドのメアリ女王はバクストンのパトロンであった Shrewsbury卿の監督の基にダービーシャー州Wingfield Manorに幽閉されていた時、近くのバクストンに「三日熱」(“tertian fever”) の治療として9回出かけている。ロバート・セルも数度バクストンを訪れた。また17世紀に入ると、タンブリッジ・ウエルズやエプソムなどの、入浴施設がない鉱泉水の湧き出る場所が新しいスパとして人気を博していったが、それは、飲泉の効能が医者による書物によって広まり、

ロンドンから近い場所にあるという地理的な優位性を持っていたからでもあった。湯船につかることのできるスパではあったが、遠隔地で娯楽施設にも乏しかったバクストンはシュルーズベリの建てたホールも老朽化し、17世紀半ばにはその人気が下降していく。これらに関しては次を参照。Hembry, 21-25; The Council of the Borough of Buxton, 2-4.

- (15) 16世紀のイギリス社会の実情を網羅的に描いたハリソンは、“Of Baths and Hot Wells”と題した Book II, Chapter XXIIIで、バース、バクストン、St Vincent’s、Holywell の4つの温泉を紹介しているが、その中でバクストンの湯音が低いために、心身の不調は穏やかにゆっくりと回復していく利点があると述べている。“...Buxton,...where about eight or nine several wells are to be seen,...; ...of all, the greatest is the hottest, void of corruption, and compared...with those of Somersetshire, so cold,...; Hereupon the effect of this bath worketh more temperately and pleasantly...than the other. And albeit that it maketh not so great speed in cure of such as resort unto it for help, yet it dealeth more effectually and commodiously than those in Somersetshire....” William Harrison, *The Description of England: The Classic Contemporary Account of Tudor Social Life*, Georges Edelen ed. (New York: Dover Publications, Inc., 1994), 285.
- (16) シーリアはエプソムが「底も見えず暗い泉」(“well...is so dark you can scarce look down into it”) (337) であり、またバーネットの「葉が浮き汚い」(“it is full of leaves and dirt”) (121) 泉水は飲む気にはなれなかったと書いている。一方「タンブリッジ・ウエルズは澱まない湧出鉄泉」(“the waters...are from the steel and iron mines, very quick springs”) (132-33) であると述べ、このスパの賑わいを描写している。ハロゲートでも彼女は「朝1クォート (1リットル強) 2日間飲んだ」(“I drank a quart in a morning for two days”) (80) ことを伝えている。